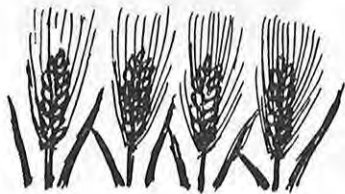


随想



参加と木鐸

長野吉章

○土曜日の午後、珍らしく閉店して県企画開発部から頂戴した「県基本構想」の骨子を通読した。

「豊かな住みよい社会の建設」、**「県民生活と地域開発の調和ある発展」**、**「調和ある人間尊重、生活優先」**の理念で貫かれては、さらに骨子の実践的な表現としては、**「魅力ある地域社会の形成、美しい熊本づくりの推進、住みよい生活環境の造成、県民生活の安全確保、健康で情豊かな社会人の形成、芸術文化の振興と文化財保護等、いずれも誠に時宜を得て結構づくめである。**

しかし、ページが進むに従って、私は次第に落着けなくなってきた。というのは戦後、数々の県計画が描かれたが、今回のものは県民の日常的な自覚と努力のもの

しかし、生意気な言い方だが、私にとって「木鐸」と「総理大臣」の連想は、吉田茂氏の「曲学阿世」の一駒を最後にぶつりと切れたような気がする。それから後の方々には必ずりいって、日本国民の唯物的繁栄のプロモーターではあったが、ついで一度も「世人を教え導く鈴の音」は響かせなかったようである。

○今日、物心両面において世界的に人類の危機が叫ばれるさ中にうたがえられた、この県の基本構想が県民の「参加」のもとに少しずつでも「実現」に向って駆動するためには、知事さんをはじめ各界の指導的立場の方々、少なくとも下記重点について明確な合意に達し、その上で高らかに「木鐸」の音を肥後の街や村にまく響かせることこそ大前提ではあるまいか。

その重点とは
(一)基本構想の展開にあたって ○行政独自で実行する事項 ○県民に努力や協力を求める事項 ○地域の企業に反省や努力や協力を求める事項を具体的に示し、はっきりとした姿勢で県民の社会的責任の遂行を要請すること。(二)その前提として、この構想の実施過程において、県公務員の一人一人の方々が、その公務の執行を通じて「県民が参加せざるを得ないように」率先垂範を行うかについての、行動綱領を打ち立てること。
(三)「豊かな社会」を指向したアメリカが、その過程で大都市の治安、風俗が極端に混乱していった事実等をはっきりみ

裏づけを必要とするものは、かつてなかったような気がはじめたからである。そこで私は気持ちを整理するために、県民としての構想の進展に貢献すべく県民に出来ることはどんなことがあるだろうと、極めて身近なことから拾い上げてみることにした。「あるわ、あるわ、大ありである。」

(一)〜(三)に関しては、①庭の樹木や草花をかわいがるだけでなく、とり木やさし芽によって育てた苗をどしどし知人にプレゼントすること。②家の周りの道路の草取りや清掃に、より念を入れること。③「塵芥集め日」の跡の清掃に心を配ること。④近くの白川や下水溝に塵芥を捨てないだけでなく、投棄する者を積極的に監視摘発すること。⑤野犬や野良猫、さらにねずみ、ゴキブリ等の駆除を率先して実行すること。⑥町内道路舗装の促進に積極的に参加すること。⑦隣保の共同焼却炉設置に取り組むこと。⑧たまには付近の公園の除草奉仕をすること。⑨

(四)については、①絶対加害者にならないよう、タクシーに乗っても飛ばさせない。②子供たちに安易に車を買わせない。(もっぱら消極一方ですかな)
(五)については、①現在やっている職場、社会両面におけるスポーツリーグとしての時間は、年齢とともにふやしこすれへらしはしない。

内については、何にも出来ないが、極力県内文化財を人を誘って見て歩くことにより、それらの存在価値を高める。あまりに生活密着の汗くさい一住民の視点から、ちよつと背のびして、企業

つめ、「魅力ある地域社会の形成」は、「物的整備」のみに依存して出来るものではなく、県民の「個人」、「社会」両面の道義性の向上あつてはじめて確保出来るものであることを公共、民間のあらゆる情報機能を通じてくりかえし強調することであろうと確信する。

○申すまでもなく、封建社会における「木鐸」の鳴らし方と、大半の国民が自由飽食しきっている現代とでは、その鳴らし方には自ら技法の相違はあろう。しかし、指導者が正しい理念と目標をもって、「おれについてこい」という「一念」に徹して「木鐸」を振れば、県民は行動しようとうずうずしており、その潜熱の高まりは戦後史を通じて最高の水準にあると、地元紙の某権威者が過日私に話してくれたが、私も全く同感である。
(肥後銀行常務取締役)

ふるさと

吾和小石

熊本に移り住んで満九年になる。草木が植えかえた当時弱るようになり、私達も精神的、肉体的にも仲々風土になじまず、何となくサザエが殺にこもった様な気持ちで過したものだ。熊本生れの主人のみは魚が水を得た如く友人や兄弟達に温く囲まれて幸せ一杯

一員として出来ることはないかと考えてみると、①店舗の周囲の清掃美化に、より気を配り、広告等も地域の修景を害さないようつとめる。また、サービスピには花の種子や家庭用ゴミ袋等をどしどし採用し、美化に協力する。②新しい住宅地域における水道新設や、市街地における水先式便所へ転換のための消費者ローンの提供、③緑化のための個人庭園ローンの提供、④公害関係融資の積極化等、思いは、無限に拡がってゆく。

ついでのことにもうひとジャンプして、所属している熊本経済同友会の一員として、何かならうかと考えてみる……
熊本経済界はかつてレジャー時代の開幕を先取りして「熊本振興興」を当時の有力経済人で発足した誇るべき実績をもっている。いま、福祉時代の黎明に当たって環境産業(国民生活を健康的なものにするための環境整備に関する産業でこれからの成長産業と目されている)を主軸とした「熊本福祉産業」の設立など、どんなものだろうか。現在、県内における公害防止施工、道路舗装工事、下水道建設用ヒューム管、はては緑化資源の相当部分を県外業者に依存しているのが、わびしくてならないが故である。

○陽がおちて、少し涼しい風が入ってきたお蔭で、とめどもなくエスカレーターした私の想念も冷まされた。同時に私はさつきから、肝腎な字句を看過しながら、一人角力をとっていたことに苦笑がこみ上げてきた。それは、「これらを県民の参加のもとに」という一節である。

ような顔をしている。それを見るとよい自分達だけは割りが合わない様な気がして子供達と私は、かすかな不幸を味わったものであった。

私の郷里は四国阿波の徳島である。年中うたた寝しているようなノンビリした町であるが、年に一度だけ目覚めたように活気が出るのが八月十五日阿波踊りの季節である。七月の終り頃になれば、老いも若きも踊りの練習で街中がさざめいている頃である。無性に帰りたいくなった事もなく、こちらの悪友夫人連に阿波踊りを手ほどきして肥後阿波踊りと称してウサ晴らしをしている。

戦争中私達家族は私の父の実家に疎開していた。長男が生れたばかりの時戦争とは言えノンビリしたもので山にたき木を拾いに行き、川に洗濯に、夜は電灯がつけれないので河原に出て星座を眺めて暮らしたものだ。その朝も川原に出て洗濯していると三十歳の青年が石の上に腰を下しポンヤリとしている。私は別に気にもとめず洗濯していると、その青年は私の方に近寄って来た。朝早い事でもあるし、洗濯している人の姿もボツボツ見かけるので心配はないがそれでもちよつとかまえるような気持で知らぬ顔をしながら、流れの中で手を動かしっていると、私の横にかがみ込みニコニコとつぶやくような話し方で「山があったり川があったり不思議なナア」「雲があったり牛があったり不思議なナア」と言う。私は合いずちを打たねば悪いような気がして、その人のまつ毛の長い澄

「参加」、「参加」、「参加」……この容易ならざる二つの字をみつめながら、私の想念はまたざる羽根を揚げはじめた。

○私は職場で壮年ばかりの「ランニング会」をやっている。月二回、白川畔、大甲橋、明午橋間の緑したたる小径をトレーニングに使わせていただいている。鶴田翁の心血こもるこの小径を無料で使わせていただいているので、せめてもの償いに、先月から練習前に河岸公園内の草取りを十分五分皆でやることにした。ところが近くのベンチで青春を謳歌していた長髪のアベック族が「いつてん来よって、草どまたらんな」と言い言、二組もこのささやかな「勤務奉仕」に「参加」してきた。私たちが中年男の間に静かな感動が伝い流れた。後刻ビールを傾けながら、期せずして我々の口から流れたのは「動機づけいっちょばい」というしみじみとした反省の言葉であった。

○「木鐸」という言葉を近頃なせか懐しく思い出す。この言葉を中学で教わったのがたしか昭和十五年頃だった。漢和辞典によれば「昔、中国で官吏が人民に法律命令などを発表するときにならした木の舌がついている大きな鈴」、転じて「世人を教え導く人」とある。中学、高校(旧制)、大学、そして社会人への人生航路の節々で、私はこの言葉を思い出した。それは主に総理大臣が代わる時などであった。その度びに新しい「木鐸」にひそかな期待をよせたものであった。

んだ眼を見ながら、「ホンにネ」とうなずくと嬉しそうな顔をしてそのあと早々と○○○○不思議なナアと続くのである。それから時々畔道等で行き合う事があったが、いつもスーと近づいて来て例の「子供が居たり犬がおったり不思議なナア」とつぶやくように言っていて通り過ぎて行く。キチガイさんと言うのは、それまでの私の印象では汚れた姿でうろついているのであるが、その青年はいつも小ざつぱりした姿で一見普通の人と余り変りない。主人にその話をすると私の顔を見ながらニヤニヤして「フンそれは案外大哲学者かも知れんぞ」と笑っていたがどうもその会話の中に「そんなお前さんにはかり問いかけるのは次元がよく似た人間だと思っているからだろうというふうなふくみを感じられて、シヤクにさわつたものである。

ふるさとを想う時何故かこのように一世紀も昔のようなのんびりした風景ばかり浮かぶのである。ひところテレビは日航ハイジャックの話題で明け暮れた。海は汚染され、母親は子供を産み捨て、といふ世相の中で私の心は過去の、のんびりした日々が恋しくたまらないのかも知れない。

熊本での十年近い歳月が流れた今ではどうやらしっかり根が張り、枝葉も無理なくのびるようになって、少し位風が吹いても倒れない自信が出来たような気がする。今私の部屋に山口誓子の句「炎天の速き帆や、わが心の帆」と言う短冊がかかっている。

(主婦)